

「全員長期海外研修」に向けて学習意欲を高める試み

塩 澤 正

はじめに

本学の「優秀教育活動・改善賞」を3年続けて頂戴した。つたない実践を評価して下さった選考委員の皆様と報奨金を出して下さった中部大学に心から感謝申し上げたい。

初年度は「オーラル・ストラテジー」というリスニング力とTOEICテストの準備を中心とした授業の実践が対象であった。2年目は、筆者の実践というより、学生の学習意欲を高める学科としての様々な仕組みを紹介させていただいた。3年目は、「全員長期海外研修」を成功させるために新設した授業「異文化適応入門」での試みを評価していただいた。そこで、本来ならこの3つの実践をここでも紹介すべきであろうが、現在、筆者も英米科も最も力を入れている「全員長期海外研修」とそれに向けての学科の取り組み、つまり2年目と3年目の実践を紹介させていただき、筆者の3年間の報告・総括とさせていただきます。具体的には「F科レベルアップ計画実施案」と「異文化適応入門」の取り組みを紹介する。

I. 学習意欲を高めるための仕組み

A. 「自律した学習者」を作ることが力ギ

本学の英語英米文化学科の一番の「売り」は2年生の春学期と秋学期に行われる「全員長期海外研修」である。しかし、他の留学プログラムも同様だが、参加すれば英語力が伸び、異文化適応能力がつくというものではない。特にこの長期海外研修は現地の学生と肩をならべて本格的に専門の授業を受講する、という厳しい学習環境が待ち構えている。成功させるためには、それなりの心の準備と英語力が必要である。そこで、英米科では1、2年次に集中的に英語力を養成することを目的としたカリキュラムを組んでいる。週に6コマの受講が義務づけられた「リテラシー・ストラテジー」と「オーラル・ストラテジー」である。しかし、それでも英語の運用能力を格段に上げるには十分とは言えない。授業外で多量に英語に触れることなしには、英語力の向上はありえない。積極的に自ら学習に取り組む姿勢が必要なのである。こういう態度を身につけた学生を「自律した学習者：Autonomous Learner」と呼ぶ。そこで、学科として、授業外でも学習意欲を高める仕組みを考えることとした。これが「F科レベ

ルアップ計画実施案」であり、2004年度から実施されているものである。

B. F科レベルアップ計画実施案

学生の学習意欲を高めるのはカリキュラムであり、教員の熱意や普段の授業の中身であり、その運営方法であることは間違いない。しかし、外国語のように巨大な体系の習得と技術の訓練を必要とするものは、授業だけではその習得はとうてい望めない。授業以外で英語への接触時間がどれだけあるかが、その成功の鍵である。そこで、英米科ではカリキュラムを工夫することは当然であるが、それ以外に授業外でできるだけ英語に触れることができるようにいくつかの仕組みを考えた。以下その概要を紹介する。

1. 学科の目標を学生に知らしめる

まず何より、学科の目標（どのような学生を養成したいのか）を明示して、常に意識させることにより学習意欲を高めることとした。それは以下の三つである。

本学科の学生は：

- a. 本格的な英語運用能力・異文化間コミュニケーション能力を持つ。
- b. 日本というしっかりした基軸に立ち、自分を表現・行動・問題解決できる。
- c. 英語圏の文化に対して深い理解をもつ。

これを主要ゼミ室をはじめ、資料室などの壁に貼ると共に、フレッシュマンゼミ、各学期始まりのオリエンテーション、配布冊子などで広く頻繁に知らしめることとした。英米科は英語の運用能力の養成はもちろん、しっかりとした日本人としてのアイデンティティーを持ち、英米の文化や言語学に精通し、さらに、「たくましい地球人」として、問題解決能力と行動力を持つ学生を育成したいという意味である。

2. 英語運用能力の目標を立てる

英米科に在籍し英語の運用能力が十分ないということは、水泳部に在籍して水泳ができない、そろばん塾に通いながら、そろばんができないなどと同じで、基本的にはあってはならないことである。そこで、思想・

文化、言語学、応用言語学などの専門的な研究を始める前に、とにかく英語力を学生につけさせる仕組みを考えた。そのためにはまず具体的目標値が必要である。

英語運用能力の客観的な基準として、TOEICを採用することにした。もちろんTOEICの点数が全てではない。あくまで単なる英語力を計る客観的な基準の一つにしか過ぎないことは十分承知している。コミュニケーション能力を単なる紙と鉛筆で図れるとは思っていない。しかし、今のところ、最も信頼できる基準の一つであり、施行しやすい点から、世界的な基準を使って期待する英語力を学生達に示すことは意義があると判断した。

学生には、毎年最低1回、卒業までに6回の受験を義務づけている。その最終目標はTOEIC730点、TOEFLに換算すると550点（ペーパー版）である。これはかなり高い点数である。TOEFL550点というのは、アメリカの大学院に進学するときの最低基準と同じである。つまり、その気になれば、英米科出身者全員がアメリカの大学院に入れるだけの英語力をつけて欲しいという意味である。無謀なほど高い点数であるが、期待は高い方がいいと学科で判断し、あえてTOEIC730点（TOEFL550点）を卒業時の目標点として、学生に入学時のオリエンテーションから明示した。以下がその目標値一覧である。

- 1年：TOEIC470・TOEFL460・英検準2級・
TOEIC100点up、英文論文5枚以上
- 2年：TOEIC570・TOEFL490・英検2級・
TOEIC100点up、英文論文8枚以上
- 3年：TOEIC650・TOEFL520・英検準1級・
TOEIC100点up、英文論文10枚以上
- 4年：TOEIC730・TOEFL550・英検準1級・
TOEIC100点up、卒論を英文で書く

しかし、これは、単なる目標値ではない。これは単位にも連動し影響がでる仕組みとなっている。つまり、これが達成されないものは、1、2年次においてはオール・ストラテジー D, H（後期科目、2年次秋学期に留学しているものは、長期海外研修J）の単位と連動させ、D評価とし、再試で合格しないものはE評価とするとした。3、4年次においては秋学期のゼミの単位の半分を上記の基準が締める、と公表することとした。学科は本気であることを学生にも理解してもらうためである。

もちろん前述のように、TOEIC試験だけの画一的なものでは言語能力のような複雑な体系を計るわけにはいかない。よって、TOEICの伸び幅、英検、TOEFLも基準に加えてある。さらに、この目標が達

成できない場合は、英文論文を一定枚数書くことにより、その能力があると判断するという一定の主観的判断基準も採用した。2004年度入学生からこの基準は適用され運用されている。2年後には全学年に適用される。

3. 学科独自の授業評価を実施

教員は全ての授業において大学の授業評価で4.0以上をとることを目標とすることとした。3.5未満は何かの改善点が必要であるということを受験に受け止め授業改善に努める。しかし、本学の授業評価は大雑把であるため、F科独自の授業評価表を作成し学生からより詳しいフィードバックを得るような仕組みを作った。記述式が中心である。実施、集計が大変であるが、より具体的な情報があり、授業の改善に非常に有効である。結果は印刷して英語英米文化学科全教員に配布し、FD活動の一環としている。

4. FD会議を毎週実施

上記3を達成するために、毎週木曜日の3、4限目をFD会議の時間と決め、各教員持ち回りで授業活性化の提案や本の紹介を行っている。忙しいなか毎週集まるのは正直楽ではないが、授業に関する悩みやアイデアを共有することができ、有意義な時間となっている。

5. 研究授業、授業参観の実施

「授業見学週」を学期の後半に2週間設けて、教員同士お互いに授業を見学しようこととした。この期間中に各教員は必ず1クラス以上を見学する。見学中は黙って静かに授業観察し、授業後に簡単に口頭かメモでコメントをするという仕組みである。中学や高校では研究授業と称して互いの授業を参観することが必ず学期に一度は存在する。中等教育界ではごく普通のことである。教育機関でありながら、大学だけ「研究授業」が実施されていないというのは不可解である。本格的な「研究授業」の第一歩がこの授業参観である。常に授業へのドアを開いて、いつでも授業参観を許可するのが本来の姿であろうが、現在のところ、一定の期間だけとしている。しかし、実情は、お互いに忙しすぎて、授業見学に行く時間が十分とれないというのが残念である。

6. 教員は授業内容、運営で責任ある教え方を

言うまでもないが、年間シラバスに沿った教え方をすることを共通確認事項とした。思いつきで授業を展開してはいけない。学生を観ながら授業をするのは当然だが、毎年教えている授業を学生の顔を見ないと計

画がたたないような授業は「計画的ない授業」とはいえない、という発想のもとに、学科で同意したものである。また、その授業で学生が最終的に何ができるようになるのか、その目標を学期初めに提示して、学期末の学生の成果に責任を持つこととした。

しかし、これは裏返せば、筆者を含む教員がいままで、このようなことをなおざりにしてきた事実があったということである。教員が会議で同意してもそれが、そのまま行動として実践されるなら、話は簡単であるが、なかなか人間の習慣は簡単に変えられないのである。今後も継続的に確認、努力していく必要がある課題の一つである。

7. 時間厳守の雰囲気を作る

授業の欠席は3回以内が許容範囲であり、4回（学期の3分の1）欠席したものは長期療養を要する病気などを例外とし、理由の如何を問わず自動的に「不可」とすることとした。遅刻は15分以内（行事なども含める）は教室に入れるが、それ以上は授業に参加させない、あるいは参加しても欠席扱いとすることとした。これを学科で統一することで時間厳守の雰囲気、ひいては授業への真剣に取り組む態度を養成したいと考えた。学期の始めに、授業で配布し、徹底を図っている。さらに、授業は5分以上遅れて始めない、5分以上早く終わらないことを学科の教員の間で合意事項とした。それでもよく授業に遅刻する教員がいる。授業を大切にする1人1人の「教員の自覚」があるかどうか、全てのカギであることを実感している。

8. 英語を英米科のオフィシャル言語の一つと公表する

英語の日常的使用を奨励するため英語を英米科のオフィシャル言語の一つとした。よって学生はいつでも誰とでも英語で話すことが「異様」でない雰囲気を日常生活の中に作ることができる。学生は教員に英語で話しかければ、教員も英語で話し返すというシステムである。全ての会議や講義を英語で行うという意味ではないが、英語を使うことが奨励される雰囲気を作ることが大切だという意味である。学科のポスターなどは、あまり間違いを気にせず、まずは英語で作ることが奨励している。授業で「まちがってもいいから話さない」といいながら、一方で、「恥ずかしい英語をどこにでも貼るな」というのは矛盾しているのである。もちろん、大学祭の研究発表のような、学外の人の目に触れるようなものは別話である。

9. 「English Table」の設置

ゼミ室の一つを昼休みに開放して、英語を使いながらお弁当を食べるというシステム「English Table」を運営している。毎昼休み、ネイティブスピーカーの留学生にお願いして英語で学生と会話をしてもらっている。学生は単に英語で会話する以外にも、ここで英語のチェックを受け、課題のインタビューなどを行うこともできる。ネイティブスピーカーの留学生も日本人の友人を作ることができると好評である。English Tableの始まりには必ず当日担当の教員が出向いて、その始まりと留学生の出席をチェックしている。手間のかかる仕事ではあるが、しばらく定着するまでは仕方がないだろう。

10. 自主学習をする環境づくりをする

英米科の主要ゼミ室、マルチメディア教室、資料室をできるかぎり開放することとした。さらにここに、自習用教材（TOEIC/ TOEFL/ 英検/英語4技能学習教材）をそろえている。英語力養成のための教材以外にも、研究用の参考文献やコンピュータソフト、ビデオ機器などを設置して、気軽に学習ができる環境を提供することを目指している。

11. 先輩が指導する「メンター制度」

メンター制度とは優秀な先輩が後輩を支援する共同学習の仕組みである。マルチメディア教室や主要ゼミ室にメンターを一人置き、後輩の学習のアドバイスなどができるシステムを作った。これにより、部屋の管理もしっかりし、常に学習する雰囲気が確保される。後輩は「すごい先輩」を常にモデルとして観察することもできる。メンターは名札を首からつるし、自ら後輩に声をかけるよう指導している。

12. 冊子『たくましい地球人』の作成と配布

上記目標や学科内の決まりごとなど具体的に記述した『たくましい地球人』を作成した。これは学科の便覧の意味を持つ。このなかには、遅刻や欠席への対処、期待される英語運用能力、その勉強方法、授業への姿勢、先輩のエピソードなど、学習意欲と将来の職業意識を高めるような情報と具体的方法が書いてある。これは学科の教員が共同で執筆したものである。

13. *The Daily Yomiuri* を1年生全員に教材として持たせる

英字新聞*The Daily Yomiuri*（金曜日版）を週に一度、一括購入し1年生に毎日持ち歩くように指示している。掲示板の前において、1年生は金曜日の朝、自分で一部を受け取り、1週間持ち歩く。各教員は学

期に最低一度はそれを授業中に使うという仕組みである。1年生のときに、英語学習用に加工されていない生の英語にできる限り触れてもらい、自ら積極的に求めて英語を読むという態度を養成したいと考えている。

14. 大学祭研究発表で活性化

英米科では大学祭で毎年研究発表をしているが、これに4年生を除き、全員が関わるようにした。2年生は、長期海外研修の報告と紹介、1、2年生は学科内スピーチコンテスト、3、4年生は各ゼミの研究発表に関わることを義務付けた。さらに、2005年度は中部大学プレゼンテーションコンテストを同時期に開催し、1年生は全員が参加することとした。

15. 学科内学生ニューズレターの発行

学生のコミュニケーションと学習意欲の向上のために、学科内の学生ニューズレター (F News) を学期に2度発行することとした。すでに12号まで発行されている。編集長以下、執筆者、編集委員は全て本学科学生である。留学中の学生や本学に留学している海外からの留学生にも執筆してもらっている。これにより、学年の枠を超えての情報交換が可能となった。「先輩からのありがたいお話」などは、非常に好評である。

16. フレッシュマンゼミでの目標と指導の統一

1年生の時に学生に勉強する習慣をつけさせるが大切である。フレッシュマンゼミをフル活用することとした。教員の態度としては、学生を「甘やかさず、優しくも厳しく」接するよう意志統一をはかっている。前期にプレゼンテーション、後期にペーパー (論文) を書くことも統一した。これによりハンドアウトの作成、論文の書き方、ワードの使い方などの基礎は養える。論文の中身、プレゼンの中身はそれぞれの教員の専門に近い部分や知的刺激に富む題材を利用して指導している。

17. F科セミナーの継続

春学期と秋学期に学外から著名な研究者や活躍している先輩などと呼んで講演会を開いている。今までに、アメリカ研究の大御所である亀井俊介氏、日本コミュニケーション学会会長の近江誠氏、認知言語学で日本を代表する大津由紀雄氏、大学院に留学した卒業生や社会人として活躍している卒業生などにも来ていただいた。対象はあくまで学生であり、講師には必ず学生向けに話をさせていただくようお願いしている。最前線で活躍する一流の学者、教育者、社会人からのお話はなかなか刺激に富み、好評である。学生には全員出席を義務付けている。

18. 特別プロジェクトを実施する

英語力向上のための特別プロジェクトを行うこととした。具体的にはシャドーイングやディクテーションを利用した学習方法プログラムである。これに参加した学生で、一定基準に達したものはフレッシュマンゼミに加点することとした。例えば学期を通して15回以上取り組んだものは10%up、16-20回-20%up、21-25-30%up、30回以上40%upなどである。継続が難しくこのプロジェクトは2005年度はいったん中断した。

C. ここまでのまとめ

学習意欲を高める試みを、実行可能な範囲で出来る限りの仕組みを考え実行している。上記以外にも学科独自の掲示板の設置、卒業論文発表会の開催、英語ハロウィーンパーティー開催、ゼミ合宿の奨励、マルチメディア教室の開放など様々な取り組みを行っている。各教員もそれぞれ学生の学習意欲を高めるべく、日々努力している。成果は徐々に見えてきているが、どの活動がどの程度影響があるのかは不明である。TOEICやTOEFLの点数では、非常に高い点数を取るものも出てきたが、低い点数のままなかなか上がらないものもいることは確かである。これに関する詳細な調査は別の機会に譲りたい。しかし、はっきり言えるのは学科の目標を明確に学生に提示したことにより、明らかに彼らの意識の中に、英語運用能力を付けなければ英米科学生として恥ずかしいという意識が芽生えつつあるという事実である。これを大切に育てていきたい。

反面、どのように教員が努力しても学科の仕組みを考えても、全く学習意欲のない学生もいないことはない。学習意欲が全くない学生、授業中に私語が止まらない学生、大学生とは思えない態度の悪い学生には各教員が頭を悩ませている。毅然とした態度で向かうしかないだろうが、なんとか入学の段階でこのような学生の入学をくい止める手段がないものだろうか。英語力が低からうが、やる気があれば問題ない。しかし、やる気どころか、周りにマイナスの影響を与え、海外研修に行っても、姉妹校に大迷惑をかける学生だけは、許してはいけない。長期的にみれば大学の評価を下げることとなるだろう。

様々な仕組みについて紹介した。だが、最も学生の学習意欲を上げるという点で影響力があるのは、それぞれの教員の授業への取り組み、学生への姿勢であることは間違いない。筆者ら教員が力を入れなければならないのは、日々の授業で手を抜かないことであり、それぞれの学生への期待を高く持ち、学生に挑戦していく姿勢を学生に見せ続けることではないだろうか。その意味で、上記の取り組みの内、最も大切なのが、

教員のFD活動であり、意識改革と教育技術の向上であろう。学生の学習意欲を高めるには、結局は、教員の教育意欲を高めることが一番早いのかかもしれない。

Ⅱ. 「全員長期海外研修」に向けて

A. 全員長期海外研修概要

「異文化適応入門」での実践を紹介する前に、この科目が新設されるきっかけとなった全員長期海外研修の概要とその実現までの経緯を示す必要があるかもしれない。

「全員長期海外研修」は2004年度入学生より実施されている。丁度2005年度がその実施の年にあたり、2005年11月23日にオハイオ大学に長期研修に出かけていたグループが帰国し、2004年度入学生全員が研修を受けてきたこととなる。

このプログラムの話が始まったのは2002年の秋であった。その後2003年の初旬から大学の関係各部署と話をし、2003年度始めの学長室会議、教授会での承認を経て、教務委員会で承認され、2004年度の入学生から実施されることとなった。その間、現地大学への数度の訪問、数百通の電子メール交換を行い、プログラムの調整をして、出来上がったものがこの研修プログラムである。

もともと、長期海外研修は中部大学として十数年の実績があり、参加者の帰国後の学習態度や卒業後の進路を見れば、この研修がいかに素晴らしい影響を彼らに与えているかは疑いの余地もなかった。すでに英米科の学生は半数以上がこのプログラムに自主的に参加していたが、全員が留学するとなると様々な部署との調整が必要であった。幸い、各部署担当者の理解を得ることができ、最終的には大学協議会・理事会の許可をいただき、実現に至ったものである。詳細なプログラムの紹介や今後に向けての改善点などは別の機会に譲るが、以下概要を紹介しておきたい。

1. 目的

このプログラムの目的は、必然的に学科の目標と重なる部分が多い。それは、日本という機軸にしっかり立ちながらも、本格的な異文化コミュニケーション能力のある「たくましい地球市民」を育てる、というものである。現地の大学生と肩を並べて専門科目も学習するインテンシブな英語学習環境、現地学生をルームメイトとする寮生活、世界各国との留学生との交流、現地でのボランティア活動や交流など、様々な異文化体験を通して、体験的に学ぶ。そして、その絶大な効果を考えるなら英語・英米文化を専門とする学生には全員に体験させる価値がある。これを4年間の教育システムの中に組み込み、今後他の大学の英語科との差

別化、学生数の確保、学習の動機づけの向上を目指し、教育効果の格段の向上を図ることもできる。以上が大まかな目的である。

具体的には以下の3点に集約される。

- 1) 海外での実践を通しての本格的な英語運用能力の習得
- 2) 異文化間コミュニケーション能力の向上と異文化についての深い知識と理解の習得
- 3) 異文化体験による自己表現能力、行動力、問題解決能力の向上

2. 留学先

当面アメリカのオハイオ大学とオーストラリアのニューイングランド大学の2校を受け入れ大学とし、平成16年度入学生から2年次の前期と後期に2グループに分け、4ヶ月の研修をする。これらの大学とは正式な学術交流協定を結び、人文学部（英語英米文化学科）が責任者となって実施する。

3. 科目の新設・廃止

長期海外研修を正規の必修科目として、カリキュラムの中に有機的に組み込む。新たに「異文化適応入門」を開講する。これは事前・事後の指導を含む重要な科目となる。現地で履修した授業科目の成績に基づき、最大22単位まで読み替えをする。これに伴い、2年生のいくつかの科目は開講数を減らす。

4. 効果

以下のような教育効果が期待される。

a. 帰国後の勉強態度が一変する

海外長期研修参加者は、英語力の絶対的な不足を身をもって体験し、今までの勉強では量、質、方法ともに全くダメだ、ということが身にしみて分かる。帰国後の勉強態度が一変し、その教育効果は絶大である。これだけの教育効果を一挙に生むものは、他にはなかなか考えられない。

b. 専門科目の履修が自信につながる

このプログラムは英語を使って専門科目をも履修する。自分の興味のあることを英語で学び、現地学生や他の海外留学生達と同じ基準で試されるという貴重な学習体験が、知的刺激となるとともに、それを乗り越えて単位を取得したという事実が大きな自信になる。この厳しい学習環境があるからこそ、語学研修とは違う「長期研修」に意義がある。

c. 異文化体験が国際的視野を育成し、学生自らが変

わる

行ってみないと分からないことがある。差別の辛さや人間の優しさ、マイノリティーの辛さ、コミュニケーションの難しさ・楽しさなどである。日本を客観的に見ることもできるようになる。現地学生以外にも、世界各国からの留学生とも友人となれる。「異なること」がごく普通である世界を体験し、考え方、視野が格段に広がる。なによりも自分自身が変わる。

d. コミュニケーション能力に自信がつく

英語力も格段に向上することは当然だが、アメリカ人（オーストラリア人）と英語でコミュニケーションをとることに違和感がなくなる。言葉が通じないときには言い換える、ジェスチャーを使うなど、その総合的なコミュニケーション能力は格段に上達する。電話を怖がっていた学生が、電話でピザを注文し、現地学生を自らが企画する日本食パーティーに誘うようになる。

e. 他の大学との差別化・学生の確保を図る

近隣には名古屋学院大学、名古屋外国語大学、中京大学をはじめ、ほとんどの大学に英語科に類するものがある。しかし、全員留学を打ち出しているのは中京大学だけであるが、短期的な研修を2度行っているだけである。本学の本格的な長期留学の質の高さと学科の姿勢をもっと前面に出した形で広報し、質の高い学生の確保を図りたい。幸い、本学は「充実した留学制度」があることが受験生に知れ渡っている。これを更に押し進めて、他の大学との差別化、学生数の確保を図りたい。

f. 帰国後の他学生、引いては社会への波及効果も大きい

学生が大いにやる気になって帰国すると、周りの学生への波及効果も大きい。目標もなく、だらだらと生活している学生が、自分も変わらなければ、と考えるようになる。長期研修参加者全員が英語でのコミュニケーション能力という付加価値を持ち卒業し、よい就職先を見つけ、中部大学のよさを口々に語る時がくれば、中部大学の評価も必ず上がる。

g. 中部大学生であったことが誇りとする学生が生まれ、世の中で活躍する

すでに、今まで長期研修に参加した学生達はもれなく、現在でも、この研修がどれだけ彼らの人生を変えたかを口々に語っている。一例として、1994年に参加した第1期生は、自らホームページを作り、2004年夏には10周年記念イベントをアセンズ市で企画した。彼

らの中には、新聞記者、公務員、国内・海外大学院進学者、大手商社マン、1級建築士、国際交流機関勤務者、海外ツアーガイド、日本語教師、大学教員、ネットエンジニア、国際結婚者、TOEIC 950点取得者など、社会で大活躍している人材が大勢いる。国際的な仕事につかない者も、何よりも中部大学卒業生であるということに誇りを持ち、皆、人生を前向きに生きている。彼らはこの長期海外研修が彼らの人生を変えるきっかけになったと口々に語り、そしてそれを実現してくれた中部大学に感謝している。こういう学生を大勢世の中に送り出すことが、中部大学の社会的認知度を高め、よい学生を集める最も確実な方法であることは間違いない。

長期留学は大学にとって、大きな投資だが、それに十分見合う教育的、経営的效果があると確信する。何より英語英米科にとっては、生き残りをかけてよりよい学生を集め、教育し、付加価値をつけて社会に送り出す最大のきっかけを与えてくれるものである。

5. プログラム内容：

オハイオ大学での現行の長期海外研修の内容の最大の特徴は、専門の授業が履修できることである。また、授業にはESLの教員と一緒に参加して、その復習、予習をするSupport Classが開講されている。ニューイングランド大学も基本的にこれに同様な形でプログラムを組んでいる。科目は以下の通りである。時間数は大体中部大学の1学期分に相当する。

1. 専門の授業1つ～2つ、2. 専門のサポート授業、3. 英語の運用能力を上げる授業（ESL）、4. アメリカ（オーストラリア文化）に関する授業、5. 体育、6. 月に一度程度の小旅行（ピクニック、見学旅行など）数回、7. 学期の休みを行う1週間程度の研修旅行1回

これらの授業はそれぞれ週に2～4回開講され、全体として約330時間の授業が組まれている。さらにフィールドトリップや研修旅行を加えれば、通常の中部大学での一学期の授業時間をはるかに上回る。

6. 現地での学生のサポート：

現地ではプログラム責任担当が常時、学生のカウンセリングを行い、学生の生活を見守る。オハイオ大学ではカージックご夫妻、ニューイングランド大学では田中清美先生である。F科は責任担当と密に連絡を取り、学生の生活に支障がでないよう配慮している。現地で解決できない問題が生じた場合には、F科の担当が現地まで出向く覚悟である。環境、安全面など

を考慮し、事前にプログラムの調整も含めて、現地視察を数度に渡って実施した。

7. 強制力

これはカリキュラムの一端であるため、特別な理由があるときを除いて不参加のまま卒業はできない。強制力を持たせるため、時間割の中に「異文化適応入門」(半期2単位、必修)と「長期海外研修A」(必修)を2年次の前期、後期に配置してある。

8. 特別な理由により留学しなかった者の対処

特別な理由とは、精神的・健康的理由により留学することに支障があると学部が判断した者である。これらの学生は中部大学に残り、大学で開講されている授業を受ける。留学中の必修単位は課題指導などで振り替える。しかし、これはあくまで例外的措置であり、英米科に所属するものは海外研修に参加しないと卒業できないことを周知徹底させる。

9. 退学者・休学者に対する措置

プログラム参加前に退学した学生についてはそれまでに振り込んだ海外研修費の全額を返金する。プログラムに参加した後で退学した学生については、プログラムにかかった費用を全て納入しない限り退学はできないものとする。病気、家庭の経済的事情など予想のつかない事情で、2年次に休学し、後に復学した者もこのプログラムに参加する必要がある。この場合、2年次前期に長期海外研修に参加せず、2年次後期から復学する者に限り、例外的に3年次の前期に研修参加を認める。

B. 全員長期海外研修の効果

まだ、1年目であるため、その効果の検証はこれからである。今後、アンケートやテストなどの数値でその効果を具体的に検証していくつもりである。しかし、いままでのアンケート結果や学生の学習態度の向上などを見るにつけ、予想通りの効果が出ていることは間違いない。検証の結果は別の機会に譲るが、以下の現地留学中の学生と本学学生との筆者のホームページ掲示板でのやり取りを読んでいただければ、いかに彼らが、助け合い、苦労し合い、学習に取り組んでいるか、また、この研修から人間関係を含め様々なことを学んでいるかがわかる。そのまま一部を本人達の許可を得て掲載する。

投稿1. 研修経験4年生の先輩から励ましの書き込み

そっちに行って丁度1週間目のころ、英語が聞き取れなくて伝えたいことが上手く伝えられなくてね、ど

うしようもなく歯がゆくて悔しくて友達がいる前で泣き出してしまったことがあったの。これがオハイオで初めて泣いた夜でした。そんな私を泣き止むまで抱きしめて励まし続けてくれた友達は、今の私にとってかけがえのない存在です。そんな人と出会えたのもオハイオに行って同じSouth Greenにいたからです。

投稿2. 留学中への学生への先輩からのメッセージ

留学はホントにその人次第。良くもなるし悪くもなる。でもその時は分からないけど、日本に帰ってきてから“あっ、自分成長したな”って分かるんだよね。あたしもそうだったっけ。自分で苦しい時悲しい時辛い時に乗り越えられた事が沢山あるから今辛いことがあっても平気。そしてきっとこれから。いい仲間もたくさんいるし。人と触れ合う事ってホントにいいことだよね、先生!!あたしは今は就活に燃えています今度は副社長と会って話を聞く予定。やっぱり社長やトップの人とあってその会社の事とかその人の考えを聞いてから入社したいから。目標があればホントに何でもできる。あたしには将来自分の喫茶店を持つという強い強い目標があるからこんなにこんなに頑張れるんだろうな〜。凄くなって自分のことなのに思うことが最近ある(笑)。やっぱり仕事をするなら絶対自分の好きな仕事がしたい。妥協はしたくない。

投稿3. 留学中への学生への先輩からのメッセージ

日本はまだ何だか寒いです。はやくポカポカな陽気の下で仲良しのゼミのメンバーとお花見がしたいです。確かに、South Green寮はみんなが頻繁に集まってくるようなGreenではないけれど、みんなが知らない素敵なSouth Greenをあなたたちは生で感じる事ができるんだよ。そういう意味ではSouthに自分の寮をもつあなたたちは本当にラッキーだと思います。日本に帰ってからね、不思議とよく思い出すのがSouthの自分の寮のことだったりするの。もちろん他の場所でのことも思い出すんだけど、部屋で寂しくて辛くて一人で泣いた部屋、友達と喧嘩して話し合った夜、夜中まで課題をこなしていたテスト期間、オハイオに行って生活する上で絶対に自分が通る辛い壁はいつもSouthにある自分の寮と一緒にした。辛い時期は本当に自分を成長させてくれるあの頃があったから今の自分があるんだと私は信じています。辛かった思い出って楽しかった思い出より鮮明に心に刻まれるもの。だからSouthでのことを思い出すと長期研修が始まった頃感じたまま気持ちになれるから、いまでも目が潤んできちゃうことがあります。本当に・・・それくらい大変なことがたくさんあったから。

投稿4. 留学を振り返ったメッセージ

私はEast Greenのブライヤンってとこだったよ。
オアシスやゴディーにはかなり近いね!!
ねーみんな??あの時は色々ありすぎて頭ごちゃごちゃだったね。でも友達の大切さを再確認できた時間でもあるよね。でも私は人生で1番のいい経験が出来たと思ってよ。あんな経験はもう二度とできないね。まーどらFATな生活をおくれてたのもOHIOのおかげやしね。結局写真見て後悔している今の私やけど・・・。英語だけの環境にいられることってかなり貴重だし日本にいたら絶対経験できないことやった。いっぱい泣いて笑っていい経験をしたね。

投稿5. 留学中のE子さんから

ホントにいい話を聞かせてもらってありがとうございます☆あたしはWrayという寮に住んでいます。サウスは建物自体そんなに新しくはないけど、緑がいっぱいで自然の好きなあたしにとっては最高☆授業は先生の話がなかなか理解できないときがあったり、宿題の多さに苦労してるけど、みんなそれぞれ頑張ってるよ!あたしの部屋にはルームメイトが来てないんだよね。なので市川先生が今確認を取ってるそうです。でも、同じ階の人と仲良くなれたからよかった☆昨日もAshleyという隣の部屋に住んでる女の子と長話をしてました。彼女はアメリカ人だからもちろん英語で喋ってるよ!!初めて違う国の人と恋バナをしたの☆貴重な体験ナリ☆まだまだ日本語を話してしまうことが多いけど、今は日本人のC子とお互い話すときは英語で喋ろうとしています。なかなか言いたいことがうまく言えないけど頑張るわ☆

投稿6. 出来るだけ英語でしゃべるよう先輩からアドバイス

「日本人の友達同士でも英語をしゃべろーよ!」とか決めるのはいい事やと思うよ。でもやっぱり所詮日本語を母語にしている同士だからなーなーになってしゃべらなくなってくるんだよね。でもちゃんとやる気があれば出来ると思うよ。私もやってたしね。

でも私が思うのは外国人の友達としゃべるのが一番!!なるべく外国人のいる環境にいるのが色々な事覚えれるし、スラングとかも覚えられるよ。しかもlistening力も確実につくしね。だから一番のお勧めは外国人の友達を作って仲良くなることかな。で、自分の友達にも紹介してみんな仲良くなればもっと楽しくなるはずだよ!

私はクリスっていう子と仲良くなってすごうれしかったし、彼から色々なことを学んだからね。住んでいる国、育った環境が違う人間でも気が合う子はいる

からそういうことは言葉が十分でなくても通じ合えるはず!

私はそういう外国人の友達をOHIOで沢山見つけていまでも連絡とりあったり、会いに行ったりできる仲間だからね。一生付き合える友達を作るいい機会だよ!そんな機会は日本にいたらなかなかないから今そんな環境にいるみんなはやらなきゃ損だよ!だから友達から外国人の友達を紹介してもらっていっぱい友達作っちゃえ(^o^)!英語の勉強にもね!みんなならできるはず!がんばれー(^O^)。遠い日本からみんなの成長を祈ってるよー!!

投稿7. 研修参加経験者からUNEにいる2年生の後輩へのアドバイス

こんばんは。F科三年(4月から4年になる)Aです。HPの写真観ました。みんなホントにいい笑顔しているね。オハイオにいた頃や一人でニュージーランドに行ったことを思い出したよ。留学って不安とか悩みとかたくさん出てくると思う。でもそれはきっとそれぞれのこれからの人生の財産になると思う。想像を絶する体験とかカルチャーショックとか数え切れないくらいあるだろうけど、そんな時に支えてくれるのは周りにいる仲間。あたしはオハイオでの4ヶ月間で一生信賴できる素晴らしい友達が沢山できた。何でも相談できたりもする。そんな友達ができたのなら是非大切にしたいです。オーストラリアでの現地の人との出会い、学校の友達とまた話した人、先生もう全てが一期一会だと思う。一瞬一瞬を大切に絶対後悔しないように日本ではできない経験をみんなにたくさんして欲しいと思う。

海外が初めてで不安な子も沢山いるだろうけど、自分が変われば周りも変わるし自分もまた一回り大きくなる。だから怖がらずに失敗してもいいんだからいろんな事に挑戦して欲しいなー。F科のパワーを100%発揮してきちゃってください。そして大切な仲間と沢山笑って泣いて悩んで喧嘩して励ましあって、また笑って。そんな関係が築けたら素敵じゃないかなと思います。何より留学すると精神的に成長することが多いんじゃないかなと思います。長くなっちゃってすいません。それでは一年生のみんな頑張って下さい!!

投稿8. Ohio在学中の2年生から掲示板への書きこみ

ゲームが終わった後、皆で記念撮影☆もちろん今日はずーっと英語ですよ!!今日はDouganチームで話し合いをしました。。Douganには中部生が5人もいます。だから甘えが出てきて当たり前のように日本語でしゃべってた。でもこのままじゃ4ヶ月がもったいない!!何の為にアメリカに来たの!?ここはアメ



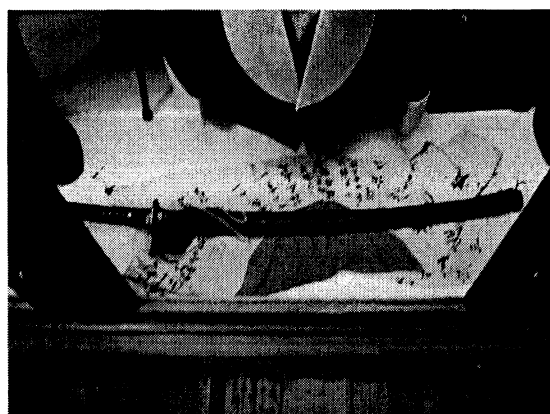
リカなのだぁ！！！！という事で、これからは必要最低限以外は英語でお話するって決めました。これはすっごく根気のいることだし、すっごく辛いことかもしれない・・・でも自分達の為だもんね。Aちゃん、私Aちゃんにばっか甘えてたね・・・日本人が多い分、私達は頑張らなきゃいけないんだよね。気づかせてくれてありがとう(*^-^*)オーストラリアの留学組には負けないぞぉ！！！！！！オハイオをなめんな～！！(笑)

投稿9. 上記に対してUNE（オーストラリアのH君から）これはオハイオとオーストラリアの交信。これもいい仲間がいると実感させられる。

みんな気づくの早いな…俺たちは最初の一週間はオリエンテーションしかなかったからそんなこと思っていなかった。でも2週間目にスゴク「英語」について問題になったんだよね。みんな喋りたいのにいえない。伝わらない。いい話し合いだったね。よかった。

英語に関して今のUNE組は自己責任に任せているんだ。他人の事ばかりきにして自分が一向に前に進まない。ってな事がよくあったからね。簡単に言うと、人それぞれってこと。やり方も性格もね。でも本当に最近授業とかでも頑張ってるんだ。俺は留学生の友達がいっつも一緒に居るから必然的に英語を話してるよ。でもDouganのみんな、息抜きも必要だよ。俺の周りも昼間は英語で話してる場合が多いけど、夜のディナーが終わってからは日本語でも話してるよ。やっぱ甘えるのは日本人だし…

一ヶ月半たって何だか一皮めくれたんだよね。Aちゃんたちもそうなるんだろうな。互いにがんばろ～。
★それと、オーストラリアに来て日本とオーストラリアが戦争した事実を改めて実感として知ったよ。これが証拠です。日本刀と国旗あと、軍服もあったかな?? 日本から一歩外に出ると俺たちみんな「日本代表」なんだって気付くんだよね。ほんとに自分が日本人だって気付くんだ。



投稿10. これはオーストラリアにいるリーダーMさんが、仲間に向かって「がんばれ～」といっている投稿

いきなりだけど…みんな辛いときもあれば楽しいときもあってそれは日本にいたころと同じことだしこっちに来て変わるもんじゃないと思うのね!!だからもし辛くなったら日本にいた時みたいに気楽に考えちゃえばいいんだって☆私もこれまで凄く辛いときがあって一人で居たときオーストラリアの子が気を紛らわしてくれたりして凄く心地よかったし♪そのことは自分から話しかけへんかったらなかったことと思うし!!こっちの人の文化はみんな知ってるはずだし私は「この人と話したい!!」と思ったら自分から伝えて話しとるよ★もし英語が間違っても全然こっちの人は気にしやへんし(笑)。かっこいいなとか可愛いなと思った人には自分から話しかけて仲良くなってそれで英語も話せたら一石??鳥かわからんし(笑)。それに気になる人ならいっぱい話したくなるしね…あっこれは私のことちゃうよ!!(笑)。

このようにオハイオ大学に留学したグループもUNEに留学したグループも英語や容赦のない学習環境と格闘し、たくましく生きている。様々な生活の問題をもなんとか乗り越え、この長期研修を最大に活かそうと前向きに努力している。様々な国からの留学生に出会い、人間関係を築き、人間関係に悩み、世界平和まで考えてしまう。こんな強烈なインパクトと効果を持つ学習環境は留学しかないだろう。これを最大限に活かすように支援し、指導していくのが今後の私達英米科教員の使命であろう。

この効果を実証的に検証すべく現在データを集めている。

Ⅲ.「異文化適応入門」の実践

長期海外研修を成功させるには事前の準備が欠かせない。以下、このために新設された必修科目「異文化

適応入門」とその運営について紹介する。これが3年目の「優秀教育活動・改善賞」の対象となった実践である。

A. 「異文化適応入門」の目標

1. 4ヶ月間の「全員長期海外研修」に向けて総合的な準備をする。
2. 異文化適応能力（知識、行動、感情の3レベルで）を英語で養う。
3. 現地での専門の授業についていけるような英語力（特にリスニング力と積極的に取り組む態度）を身につける。

B. 授業の特徴

以下のような授業運営が他の授業とやや異なり、授業の特徴といえる。

1. 異文化適応能力養成訓練、英語力養成、長期留学準備の3つの要素を有機的に絡めた授業を展開する。常に、この3つの要素が90分の授業の中に加味されるような授業運営を心がける。
2. 様々な異文化適応訓練を行う。異文化適応能力とは言語コミュニケーション能力以外に、非言語能力、観察力、行動力、自己行動修正能力、曖昧さへの寛容力、価値判断を控える能力、相手の立場に立つ能力、柔軟性、問題解決能力、忍耐力、積極性などである。全て疑似体験学習とする。
3. 英語での授業展開を心がける。上記を基本的に英語で行い、全て英語でのレクチャー、討論、日常生活に慣れさせる。（しかし、これは2005年度は約半分の時間程度しか実行することができなかった。）
4. プロジェクト型の授業を中心とする。4ヶ月間の現地でのあらゆる情報を学生が集め、それを口頭発表し合い、最終的に学期末レポートを完成させる、といったプロジェクトを一番大きな最終プロジェクトとし、常に、小さな課題を調査、発表するという形式で授業を進める。最終プロジェクトは、翌年の学生の教材の一部となる。このため、授業外での調査、課題が非常に多い。現地で収集した資料、ビデオ、なまりのある英語テープなど手作り教材が必修アイテムである。
5. 4の情報は自ら収集することを基本とする。よって、ネット、先輩の情報、本などあらゆるメディアを使う。
6. 現地の突き放したような容赦のない英語のスピードになれるために、現地で録音した生の講義や学生同士の会話を多量に聴く。
7. 帰国後のオリエンテーション、留学の報告書を

書くまでを授業の一環と位置づける。

C. 授業展開

表1が典型的な授業展開例である。英語学習、異文化適応訓練、現地情報収集プレゼンの3つの要素が90分の中に組み込んである。左のコラムが授業内での教員の活動、右が学生の活動である。

D. 授業の省察

リスニング教材は学生の今のレベルからするとかなり質的にも量的にもチャレンジングである。しかし、現地の学生と肩を並べて授業を受ける以上、この程度のことを体験しておかねばショックが大き過ぎるだろう。英語の音を追うのではなく、内容を大まかにつかむことの大切さと量をこなすことの大切さを理解させたい。今のところ全員諦めずに、ついてきているのが頼もしい。

リーディング練習に、現地で実際使っている教科書の1章分を、約15分でスキミングする練習などを行った。小見出しを読みながら、その概要をつかむという作業はコツを教えると意外とできる。しかし、同じ教材を「来週までに要約してきなさい」というと、「とても無理です」という返事しか返ってこない。実際に課題を時間通りに出したものは約半数しかいなかった。この英語の宿題の圧倒的な量をどのようにこなしていくか、これが留學生活の成功の鍵であろう。学生には、出発するまでに、その覚悟と課題の量に負けない姿勢を養ってもらいたい。

異文化適応訓練は、情報としてではなく、「行動」や「感情」のレベルで実体験しないとその理解が難しいことを理解してくれてきたようだ。但し、活動後の討論では思ったような数の発言がでないことが残念である。彼らは異文化適応活動自体は非常に楽しんで積極的に体験する。自分の行動を修正してみたいのだが、そのきっかけがないように思える。その意味でこの一連の訓練は彼らにはいい機会だと捉えているようだ。

現地での生活についての発表は学生により非常によくできている者と、適当にお茶を濁している者の差が目立つ。必ず発表前に研究室に来て準備状況を見せるように指示しているが、来ない学生も少なくない。先輩へインタビューした者や現地での宿題の実物を先輩から借りて持参した学生もいるが、反面、筆者に「やりなおし」の評価をもらったものもいる。適当にやっていたらなんとか単位が取れる、という発想の学生には、しっかりしたものができるまで、何度でもやり直させ、キチンと課題や宿題に取り組む姿勢を作らせたい。毎週、添削、返却、再提出の確認などと課題の提出状況を把握するだけでも、大変なことなのだが、何

表1 授業展開案

	教員の活動	学生の活動
0 : 00 	1. Listening : Listening の要約の宿題の確認。英語で質問を全体に投げかける。次から次へと確認質問を展開する。指名は決してしない。	答えられるものから質問に自由に答える。教員の「つつこみ」に一致協力して英語で反撃する。最後に再度 CD を聴き、要約の宿題をチェックする。
10 : 00 	<i>Live on Campus in the USA</i> (p35-39) からエイズに関するレクチャー (5 分) を CD で 2 度聴かせる。その後、内容確認の質問を矢継ぎ早に浴びせる。最後に、transcript を見せながら、意味を確認させる。	質問に自由に答える。少しでもわかったことを頼りにとにかく何らかの返事をする。その後 transcript をペアで読み上げながら意味の確認をする。
30 : 00 	2. 異文化適応訓練 1 : (自己行動力修正を体験-大声で喋る) 学生を 2 グループに分け、それぞれにペア作らせる。教室の真ん中に大きな川が流れているという設定で、離れて立ち、ペアで大声で会話をさせる。	ペアになり、一方は窓側を背にして立ち、一方は壁側を背にして立つ。大声で、英語で、「今日の予定」をお互いに聞きあう。
45 : 00 	異文化適応訓練 2 : (非言語コミュニケーションの大切さの体験) ペアをつくり、一方はできるだけ相手の目を見ないで会話するように指示する。もう一方はできるだけ相手の目をみて会話をするように指示する。その後、アイコンタクトについて debriefing (話し合い) をリードする。	立って、ペアで、「昼飯はどこで食べるか、何を食べるか」についてお互いに英語で話しあう。必ず目を見たり、見なかったり、指示を守る。その後、全体で目がどれだけのメッセージを伝えるか話し合う。
60 : 00 	3. 口頭発表 : 現地での生活について、担当者に口頭発表させる。本時は現地の専門科目の中身、宿題の量、具体例、大変さ、などについて。	担当者は前にでて、自分の担当する情報について、収集・調査の結果をハンドアウトを用意し、口頭発表する。学生は実際に使っている教科書や宿題やレポートの現物を仲間に見せて、その量や要求度の高さを知らせる。
75 : 00 	質問時間を設け、具体的な質問が学生から出るように仕向ける。ない場合は教員自らが質問する。	仲間の学生からの質問を受け、それに答える。担当者以外の学生は最後に拍手をして、担当学生の労を労う。ビデオについて質問をする。
80 : 00 	現地の授業の様子のビデオクリップ (数分) を見て、実感を得てもらう。	Listening の宿題提出。
90 : 00	翌週の担当者と宿題の確認をする。	

とかいい加減な学生がそのまま現地に行くことのないようにという思いが、今のところ、筆者の授業運営のエネルギーになっている。いつまでこの糸が張った状態でいられるのかは不明である。

総じていうと、学生は留学という目標がはっきりしているため、動機付けが高い上、課題などにも積極的に取り組んでいる。実際、最終的な調査報告書は質も高く、そのまま教材として残せば後輩の役に立つであろうものも多い。しかし、筆者のこの授業の満足度はまだ60%程度である。学生にはもっと必死になって食いついてきて欲しいと思っている。真剣すぎて、怖いぐらいの授業を運営してみたい。当分は学生との根競べである。

まとめ

学習意欲を高める試みとして、「全員長期海外研修」とそれに向けての学科の取り組み (F 科レベルアップ計画実施案)、そして、その準備プログラムとして位置づけられている「異文化適応入門」について報告した。繰り返しになるが、検証は今後の課題だが、実感としてこの全員長期海外研修の導入はかなりのインパクトを持って英米科を変えつつある。入学試験の面接では、高校生達は口をそろえて、この研修制度があるから中部大学を選んだと、言う。また、入学後もこの研修があるから、しっかり勉強しなければ、という雰囲気は1、2年生に広まりつつある。さらに研修から帰った学生達は一皮向け、一回り成長し、物事に前向きに

取り組むようになっている。「帰国した学生たちの授業は学生がやる気があって非常にやりやすい」と非常勤の先生方から言われる。この肯定的な影響や評価をさらに高めていくことが大切である。

反面、2、3人だが、海外研修に送らないほうがいいかもしれないと考えてしまうような学生もいる。基本的な生活態度や学習態度が大学生のレベルに達していない学生達だ。これらの学生の一人一人は非常に幼く、ある意味「かわいい」。しかし、その学生たちが複数集まると、一生懸命に留学に取り組む学生達の雰囲気壊しかねない。今後このような学生は増えるこ

とはあれ、少なくなることはないと予想される。学科として、このような学生の扱いをどのようにするか、大きな課題である。しかし、決してそのような学生が数人いるからといって、この全員海外長期研修の価値と評価が下がるわけではない。いや絶対に下げてはいけないと強く思っている。

このプログラムは英米科だけの力では到底成功しない。大学上層部、各部署のご理解とご協力があってこそ実現している。ここで、再度感謝してこの報告を閉じたい。

(教授 人文学部教授 英語英米文化学科)